

12月の多職種連携を考える会「語ルシストの会」の定例会に関する報告です。

今回の講師は、前畑和樹氏（みつばち診療所勤務、介護福祉士&准看護師）で「訪問診療について」というタイトルで話していただきました。

みつばち診療所のある施設「HALE たちばな」の説明があり、2021年に開設され、重度の障がいを持った子ども達や医療的なケアを必要としている子ども達、がん末期の患者様たちに寄り添える施設として、診療所（医療）・訪問看護ステーション（医療・介護）・短期入所（障害福祉サービス）・日中一時支援（地域支援事業）・加算運営などの事業を展開している複合施設だそうです。

自己紹介として、介護福祉士&准看護師という専門職で訪問診療に2015年から携わっていて、2022年から現在の「みつばち診療所」に勤務される。

通院が困難な患者、病院ではなく最後までご自宅や施設で過ごしたいという患者など、年齢や疾患を問わず訪問診療を行い、患者や介護をされているご家族などに寄り添った医療を提供されているそうです。

みつばち診療所での訪問診療看護師についてのスキルなども話され、患者が自宅や施設で適切な医療ケアを受けられるようにサポートする役割を担っていて、医師の診療補助をはじめ、問診やバイタルチェック、点滴交換やカテーテルの交換、オムツ交換やベッドメイクなど診療に関わるあらゆることを看護師は介助し、患者様とそのご家族の心理的サポートも、訪問診療における看護師の重要な役割で、医師とのパイプ役として立ち回ったりすることが看護師には求められるそうです。

今までみつばち診療所としては通院困難な高齢者や障害児者の方達の訪問診療を実施していて、精神疾患に対して実施していなかったけど、近頃、訪問診療が実施される環境を整えたということで、語ルシストの会の訪問看護ステーションや包括支援センターなどと連携して訪問診療支援を実施されているということでした。

精神疾患者の自宅での訪問診療として、患者の日常生活の中で診療やケアが提供され、看護師や医師が患者の自宅環境を理解し、個別のニーズに応じたケアを提供できて患者の尊厳を保ちつつ、自立した生活を支援でき、この環境でのケアにより、患者は自分の生活に責任を持ちながら、サポートを受けることができることが病院への通院診療と違うところだと思います。

地域在住の精神疾患者に対して、国の施策としては地域支援として医療・福祉のアウトリーチ支援を推進していますが、精神科病院や診療所などが訪問診療を積極的に実施しているところがないに等しく、医療者の守旧派的姿勢である、患者に病院に来てください、という姿勢の病院が多いのが現状ですが、高齢者に対しては訪問診療が主流になってきている中で、病院や施設ではなく自宅で診て頂きたいという

患者における医療改革を求める声がある事に応えた訪問診療の在り方ですが、時代の変化に応じて変わっていくことが求められている中で、患者中心の医療か、精神科病院（診療所）中心の医療か、問われることでもあります。

今回、訪問診療看護師として仕事をされている前畑氏に話して頂き、患者が自宅などで適切な医療ケアを受け、患者が安定した生活を送る為に必要な医療的サポートを受けながら自立した日常生活を営めるよう支援することが看護師の役割ではないか、という言葉にみつばち診療所の訪問診療の姿勢に共感するところです。

次回は、2024 年 1 月 26 日（金曜）、時間は、19 時～21 時、
場所は、県福祉総合センター1 階ミーティングルームで行います。
講師は、まだ未定ですが決まり次第連絡します。